



Panorama of Paranoia



あるひ

千切れ飛んだ花卉が、風に煽られ巻きあがる。

むせかえるようなあまい芳香の中、茂みの陰に身を縮め潜んでいたユンフォアは、息を呑んだ。

男は裾を折り、庭の中央でしゃがみ込む。そうして彼は、庭一帯に咲き誇る花の一輪に、口を寄せた。見るからに柔らかそうな薄桃の花びらが、男の薄い唇にしっかりと吸い寄せられる。

まるで空気に溶けてしまいそうなほどに淡い色合いの花。全ての色を吸い尽くしてしまうのではないかという少女の危惧に反して、彼は食むこともなく花卉を吐息で揺らすと、あっさり口から離れた。

肩を滑り背へと流れる紺色の髪。縁を飾る睫毛と同色の双眸は、口付けたばかりの花を見つめながら、ふっと綻ぶ。

「迷子かい？」

ユンフォアは、どきりと心臓を飛び上がらせた。まさか自分に向けられた言葉ではないだろう。あちらからは隠れている自分が見えるはずがない。少女は茂みの奥でさらに身を縮こませ、辺りに視線を巡らせる。だが、どこを見渡しても、花の縁を指先で辿っている目の前の男以外、他に人はいそうにない。

やがて、名残惜しそうに花を撫で終えた男は、地面に埋め尽くされた花々の元から、ゆったりと立ち上がった。

「お入り」と、男は声をかける。同時に、男の紺色の瞳が、ひたと少女を捉えた。

緑濃い葉々の合間越しにも関わらず、容赦なくかち合わされた目。ユンフォアは身体を強張らせた。

それで、ようやく彼女は、自分が茂みに隠れていたことが、男にはとっくに知られていたらしいと気付いたのである。

片手に籠を携え、おずおずと茂みの陰から出てきた少女を、男は黙して待っていた。ユンフォアは、居心地の悪さを感じながらも、覚悟を決めると、紺色の髪の男がいる場所へと歩を進める。

少女は、目の前の人物を見上げて驚いた。間近にある彼の肌は、遠目で見ていたよりも余計に白く、乳酒の上澄みのように透き通っている。もしかすると、彼の身体の向こう側が透けて覗けてしまうのではないかと思ったほどだ。切れの長い目は、ともすれば陰さえ含んでいる印象を持つが、すっきりと伸びた鼻梁の下にたたえられた静かな微笑が、彼の纏う空気をいくらか緩和させていた。

ユンフォアの目から見ても、彼の容貌の精悍さは明らかだった。村にも娘たちから騒がれている男たちがいたが、彼らと比較するにはあまりにも次元が違いすぎた。

ユンフォアは声を失ったまま、まじまじと男の貌を見つめる。不躰な視線にも関わらず、彼は

少女を咎めはしなかった。代わりに男は、「迷子かい？」と今度ははっきり、ユンフォアに向かって尋ねる。自失から立ち直ったユンフォアは、慌てて首肯した。

「……近く、の林で茸を採っているうちに、皆とはぐれてしまったみたいで」

ユンフォアは、手にしていた籠を彼の目にさらした。蔦でつくられた籠の中では、まるで傘を広げた茸が無造作に転がっている。

「なるほど」

籠の中身を検分して、男は顎に手をやった。何やら自分と籠の茸を交互に見比べ始めた男の視線に、ユンフォアは訳の分からぬ焦燥に襲われる。彼女は突きだした両手を振りながら、弁解した。

「――あ、あの、だから、違うんです。覗こうと思っていたわけではないんです。決して。この林は思っているよりも小さいから、……母さんがそう言っていて、だから、迷ったらまっすぐ進みなさいって。そうしたら、林の外に出るからって。外に出て林に沿って歩けば、絶対に村に帰りつけるからって。だから、私、林をくぐり抜けて、野に出たところで、……出たんですけど、すっごくあまい香りがしてきたから気になって、私」

「ここに辿りついたんだね？」

「あ、はい」

ユンフォアは、こっくりと大きく頷いた。

緊張しているせいか、心の臓が耳の奥でいやにうるさい。

けれども、少女の危惧に反して、彼が口にしたのはユンフォアに対する労わりだった。

「林の中では、日が暮れると野犬が動き出して危ない。よく一人でここまで来られたね」

和らいだ男の表情に、ユンフォアは反射的に泣き出しそうになった。

彼は空を見渡す。淡蒼の端には、すでに橙が滲み、気の早い星が白々と輝き始めている。こうなると、陽が落ちるまではあっという間だ。男は、少女に目を落とすと言う。

「じきに外は闇に包まれる。今から村に帰るのは危険だろう。安心なさい。一晩ここに泊ってゆくといい」

男は首を傾げ、「どうだろうか」と彼女に問うた。同時に、彼の紺色の髪が絹を広げるように、肩を滑り落ちる。

ユンフォアは、目を丸くした。

幽艶さに満ちる微笑は匂い立つほど美しく、幼い少女の目を引きつけるにもきっと充分すぎたのだ。

男は、名をカセンと言った。

翌朝、無事に村へと戻った少女は、その後も暇を見ては彼の元へと足しげく通った。

村の裏手にある林。林道から外れた林の果てに彼の屋敷があった。ちょうど林をくぐり抜けた先。ぽっかりと開けた丘野の中に建つ屋敷は、季節を選ばず常に緑で覆われている。背の高い木々に取り囲まれている屋敷の姿は目をこらさなければ見出すことができない。緑に埋もれるその姿は、ともすれば、小山のようだ。故に、彼の屋敷はきっと取り残された林の一部か、はたまた、草原にできた浮き島に違いない、とユンフォアは密かに思っていた。

あまりにもユンフォアが一人で林に出かけて行くので、村の大人たちは皆、訝しがった。そこで、ユンフォアは、カセンと彼の屋敷について説明してみたのだが、村人たちは誰もそのような屋敷を見たことがないと言う。村の裏手に位置する林は小さい。外周に沿って歩いても数刻で元の場所まで帰って来られるくらいである。にもかかわらず、村人の誰もが件の屋敷について知らないという事実を、ユンフォアは不思議に思った。

しかし、今となってはすんなりと辿りつくカセンの屋敷も、元はと言えば散々林の中を迷い歩いた揚句、偶然見つけたのだ。あの日、見かけなければ、ユンフォアも一生気付くことはなかったのかもしれない。ユンフォアはそういうものなのだろうと愚かにも納得してしまった。

初めこそ、少女の行動に気をとめていた村人たちも、それが日常となるにつれ、気にする者はいなくなる。こうして、この日も一人、林を通り抜けてきた少女は、こんもりと緑の茂る屋敷を目に入れるや否や、野を蹴り、駆け出した。

外観を取り囲む高い木立を抜け、身の丈程の茂みを抜けると、風によって運ばれてきた花の香が、鼻先をくすぐる。庭一面に広がった花々と、彼の背後にそびえる瓦屋根の屋敷に、ユンフォアは目を細めた。

色どり鮮やかな花に目がくらむ。この世の全ての色が集結したような庭の中で、庭の主人であるカセンが纏う衣服だけが色褪せていた。やはり今日もゆったりとした薄茶の衣の上から樺色の帯を絞めただけという彼の地味な姿に、ユンフォアは呆れた。こんなにも広大な屋敷を所有しているのだから、少しと言わず着飾るだけの余裕はあるだろうに。

「カセン」

「おや、来たね」

花に見入っていたカセンは、顔を上げる。ユンフォアは、手を振り上げると、彼の元へ走り寄った。

「カセンは、もう少し身嗜みに気を使った方がいいと思うわ」

「なぜ？」

カセンは首を傾げる。それは、疑問を現すというよりも、少女がどういった答えを出すのかを期待している風だった。

「だって、もったいないもの」

「もったいない？」

そう、と少女は頷く。

「だって、カセンは綺麗なのに。それに周りもこんなに綺麗なのに、カセンがそうだとがっかりするわ」

「がっかり？」

「ええ。がっかり」

ユンフォアは、憤然として言った。「それは、それは」と、カセンは口元に軽く握った拳を添えて打ち笑う。

「申し訳ないね。がっかりさせてしまって」

「ええ、本当よ。もしもカセンがもうちょっと華やかな衣装を着ていたら、この庭はもっと綺麗だったと思うの」

「そうかな」

「そうだと思うわ」

きっぱりと言い切ったユンフォアに対し、カセンはおっとりと微笑みかけた。

「けれど、もしもそうだったら、私はこの花に埋もれて見えなくなってしまうよ」

「そうかしら」とユンフォアは、首を傾げる。

「そうだと思うよ」とカセンは頷いた。

カセンは庭に広がる花に目を向ける。ユンフォアもつられて、庭へと顔を動かした。

背丈も色も異なる無数の花が、あらゆる場所で咲き乱れる。これほどまでに数多の花があるというのに、この庭には同種の花が一對としてないのだと、ユンフォアはカセンから聞いて知っていた。全ての花が一輪ずつ。故に、この庭の花の色は重なることがなく、花が互いに色味を増していく。

その事実を思い出すたびに、どうしようもなく寂しいとユンフォアは思うのだが、そんなことは気にもしないのだろうか、花はそっと風に身を委ねるだけである。

「一一見つけ出せると思うわ」

少女の言葉に、カセンは意識を花からずらした。ユンフォアは裾を翻して彼の前へと回り込むと、爪先立ち、手を精一杯空に突き伸ばす。

「だって、こーんなに背が高いのよ？ どうしたって頭が花から飛び出るわ。見つけられない方がおかしいもの」

手で示してみせながらも、背伸びした彼女の指先はちっともカセンの背丈に届いていない。よくて肩の辺りである。カセンは、一所懸命突っ張って立っている少女をとっくりと眺めた。

「おいで」

言うや否や、彼は少女が頭上に掲げている手を取る。そのまま、彼は彼女の手を導き、ユンフォアに来るようにと促した。

こぼこぼと音を立てながら清水を吐き出す泉の脇。受け皿から溢れ出た水は、陽光を反射しながら、次々と地に流れ落ち、折り重なって、細い道筋を作り出す。辿りついた庭の片隅で、カセンは「ごらん」と、小川の一点を少女に示した。ユンフォアは、目を丸くする。

「また、見たことがない花だわ」

「新しく増えた花だからね」

驚いている少女に、カセンはゆったりと微笑んで、小川を股越した。先日まではなかった花の傍にしゃがみ込み、彼はそっと唇を花卉に押し当てる。初めに迷い込んだ日から、これまでにユンフォアが何度も目にしてきた光景。カセンはことあるごとに花に口付ける。瞳を閉じるカセンの姿は芳しい花の香を吸い込むのにも似ていた。奇妙なまでに美しいその姿に、ユンフォアは度々見てはいけないものを見ているような感慨にとられる。

「カセンは……」

ユンフォアは、ぽつりと呟いた。紺色に縁取られた彼の双眸がおぼろげに開かれていく。

「なぜそうやって、花に口付けるの？」

「口付ける？」

「ええ」

カセンはユンフォアを見上げる。彼女は、小川を隔てた場所から、カセンを眺めていた。彼は頭を捻る。

「していないよ、そんなことは」

「しているわ、こうやって」

ユンフォアは、その場にかがみこむと、手当たり次第に辺りにある花を引き寄せた。小さく尖らせた口先を、花に押し付ける。滑らかな花の一端に唇が触れたところで、ユンフォアはぱっと花から顔を離れた。不確かな感触の気味悪さに、少女は花を解放した手でごしごしと口周りをこする。

いっそ傲岸ささえ見え隠れする少女の所作。だが、カセンは彼女の示唆したところを悟っただけだった。

「なるほどね。そう見えたのか。あれは、違うんだよ。私のは息を吹きかけているんだ」

「――息を？」

「そう。こうやってね」

カセンは再度、手元の花に口を寄せる。

「そうして花を飛ばすんだ」

ふっと吹きかけた彼の息は、確かに花を揺らした。風が揺らしたのではないかと見紛うほどかすかな動き。ユンフォアは騙されたような気になった。そもそも、花を飛ばすとは一体どういうことなのか。飛ばすと言う割に、花卉のひとつひらも宙に舞ってはいない。

ユンフォアの心情を如実に読みとったのだろう。「やってみれば、そのうちわかるよ」と差し延ばされた彼の手にユンフォアは、大人しく従った。

小川を飛び越え、差しだされるままに男の手を取った少女は、彼の隣に腰を下ろす。どの花でもユンフォアの好きなものを、というカセンの言葉に、彼女が選んだのは、空色の花だった。細い緑の茎に、小さな花がいくつも連なっている。

半信半疑の彼女が上目を使ってカセンを伺い見れば、彼は静閑な微笑をのせて頷く。彼に依じて、ユンフォアは、身をかがめ空色の花に顔を寄せた。今回は口付けるのではなく、カセンに倣い、軽く息を吹きかけるだけに留める。

熱い汁を冷ますのと同じ仕草。しばらく、至近で律動する花の様子に見入っていたユンフォ

アは、花に何の変化も訪れないことを知ると、眉根を寄せた。

「何も起こらないじゃない」

「いいや、もう起こっているよ」

カセンは手を膝につき立ち上がる。微笑ばかりを貼り付けているカセンに、ユンフォアは、子どもだからとからかわれたのだろうか、とますます機嫌を損ねた。

「カセン！」

「どうした？」

肩を怒らせている少女を、男は不可解そうに見やる。しかし次の瞬間、「ああ、そうだったね」と彼は両手をぱちりと打ちあわせた。

「ユンフォアは、もっと鮮やかなものが欲しいのかい？」

「……………一体、何の話？」

ユンフォアは、怪訝気にカセンに問い返す。先まであった少女の勢いは、彼の言動の唐突さで一気に削がれた。

「服だよ。さっき話していただろう？」

同意を求めてくる男。ユンフォアは、彼の視線を受け続けながらも、必死に思考を巡らせた。ようやく思い当たった事象に、彼女は「ああ……」と相槌を打つ。

「カセンの話はいつも脈絡がなさすぎるわ」

「そうだろうか」

「そうよ」

ユンフォアは、はあと溜息をつく。

「それで？ 服がどうしたって言うの？ 私がカセンの服を地味だって言ったことをきにしているのなら謝——」

「いいや。私の衣服が地味ならば、ユンフォアの衣服の方がよっぽど地味なのだろうと思ったのだよ。必要なら用意しよう。ユンフォアは、華やかなものを好むのだろう」

「……………皮肉？ ……ではないよね」

邪気の欠片も見えないカセンの様子を見れば、彼を語る気力さえ起きない。それでも、ユンフォアは「酷いわ」と零すのを忘れはしなかった。

彼女は、身に付けている衣服の裾を摘みあげる。何の染色もない生成の生地は、月日を経過して黄ばんでいた。胸下で留めた帯は、同じ樺色と言ってもカセンの上質な絹でできた帯とは比べものにならないほどに劣っている。しかし、母が手ずから縫いとってくれた刺繍が裾を飾っている分、ユンフォアが持つ衣服の中では、これが一番上等な品だった。

「何の色がいいだろうか。ユンフォアが、花のように色を纏ったら、それは綺麗だろうね」

「いらないわ、そんなもの」

微笑するカセンの前で、ユンフォアは彼をキッと睨みあげる。そうして、目の下を指先で引っ張り下げた少女は、彼に向かって「カセンのばか」と舌を出してみせたのだ。

ユンフォアは身を翻して走り出す。カセンは啞然とした面持ちで、あっという間に屋敷を出て行った少女を見送った。庭園の上を吹き過ぎた風が、乱れ咲く花々を凧ぐ。

家まで一心に駆け戻ったユンフォアが、周辺にはなかったはずの小さな空色の花の群生を村の

片隅で見つけたのは、それから数日後のことだった。

しとしと、その日は朝から雨が降り続いていた。

前髪から滴り落ちる雫を時折手の甲で払いのけながら、ユンフォアは林を抜ける。霪がかかっている野を彼女は足早に通り過ぎた。雨を吸って重たくなった服が肌に張り付く。靴に沁み込んだ水が心底気持ち悪く、ぐちょりぐちょりと、足が土にとられる度に不快さは増した。

それでも、彼女がこの日、屋敷にやって来たのは、これから先しばらくの間、カセンに会うことが叶わなくなるからだ。雨が上がり次第、村では稲の刈り入れが始まる。幸いなことに、今年例年よりも多くの収穫が見込めそうだと大人たちは喜んでいて。

毎年この時期の収穫高は、年貢として領主に納める為だけでなく、先一年間の食卓に大きく関わってくる。稲の収穫作業には、子から老人まで、自分の足で歩ける者たち皆である。もちろんユンフォアも例外ではなく、村総出で行われる刈り入れは、一年で最も慌ただしく、最も活気に満ちた時期だ。

敷地内に踏み入ったユンフォアは、木立から続く茂みを越えようとしたところで、足を止めた。

呆然と目を瞠り、彼女は立ちつくす。庭には二人の人物がいた。一方はカセンであり、もう一方はユンフォアの知らない女だった。

結いあげられた艶やかな黒髪が、金色の簪で纏められている。彼女が纏っている衣装は、鮮やかな花を背景としても劣ってなどいなかった。何より、今にもくずおれそうな華奢な儂さが彼女の美貌を一層際立たせていた。

降り続ける雨の中、黒髪の女は、カセンの胸に寄り添うようにして立つ。カセンが、そっと彼女を包みこんだのは、至極当然のことだったのだろう。

まるで一枚の絵を切り取ったかの如き彼らの姿。ユンフォアは、くるりと二人に背を向けると、その場にしゃがみ込んだ。振り返れば、すぐにでも茂みの陰から彼らの様子を伺い知ることができる。だが、彼女にはそうすることができなかった。出所の分からない憤りを感じて、ユンフォアは荒く息を吸い込む。握り込んだ手の甲に、雨粒が落ちた。自分以外の誰かもこの場所を知っていたという事実には、彼女は打ちひしがれた。陰鬱さが胸を占める。カセンに裏切られたのだ、とユンフォアは感じた。

ユンフォアは、唇を噛みしめる。そうしていなければ、あまりの寂しさにわめき散らしてしまいそうだった。両足を抱え込んで、少女は額を膝の頂に押しつける。

「ユンフォア？」と涼やかな声がかかったのは、その時だった。

茂みを掻き分ける音が、耳に届く。「ああ、やっぱり」と、カセンは茂みの陰にうずくまっていた彼女を背後から覗きこんできた。

「泣いているの？」

「泣いてなんか――」

ユンフォアは、反射的に顔を上げてしまった。振り仰いだ先には、曇天の空の代わりにカセンの顔があった。

「おいで。こんなところにいたら濡れてしまう」

カセンは自身の身体で、彼女にかかる雨粒を遮る。紗幕のように降りた彼の紺色の髪は、ユンフォアの視界を左右から覆い隠した。

「――泣いてなんかいなかったわ」

「そのようだね」

カセンは、微笑する。「おいで」と彼はユンフォアの両脇から、凍える彼女の手を取った。

「熱いお茶を淹れよう。見せたいものがある。花が新しく咲いたよ」

「だけど、さっきの――」

「ん？」

口ごもった少女に、カセンは首を傾げる。居心地の悪くなったユンフォアは、まじまじと見つめてくる紺色の双眸から、目を逸らした。

「.....行く」

端的に答え、彼女は口を引き結ぶ。カセンの掌中から手を離し、立ち上がろうと、一人足に力を込めたユンフォアは、その中途、意志に反してぐらついた足元に、声を上げた。

前触れなく後方へと傾いだ少女の身体。咄嗟にユンフォアから身を引いたカセンは、彼女が倒れる寸でのところで少女の腕を掴んだ。危ない、とカセンは顔を顰め、ユンフォアを引っ張り上げる。未だにがくがくと足を震わせている少女の身を、彼は片腕だけで支えた。

「雨で身体が冷え切ってしまったのだね。この雨だ。今日は来るべきではなかったんだよ」

カセンは、ユンフォアが崩れてしまわないようにと、彼女を支えたまま注意深く腰を下ろした。濡れて衣服が張り付いた細い腕を自身の首へと回し、ユンフォアを背負い上げると、屋敷に向かって歩き出す。

選択肢もなく彼に負ぶわれたユンフォアは、頬をほてりとカセンの肩に寄せた。

「.....だけど、カセン。明日からはもう来られないわ」

「なぜ？」

「稲の刈り入れが始まるから」

「ああ。今は、そんな季節なのか」

めまぐるしいね、と彼は言う。

茂みを抜けた二人は、色に溢れる庭園に足を踏み入れた。重なりあって降る雨が、花々の輪郭をおぼろげに霞ませる。

いつの間に帰ってしまったのか、さっき見た黒髪の女の姿は、もうそこにはなかった。茂みに隠れていたことが気付かれたから、彼女は帰ったのだろうか、とユンフォアはぼんやりと考えた。

「.....私が来ないとカセンは嬉しい？」

「どうしてそんなことを聞く？」

「そうなんじゃないかと思ったから」

「そのような時は、どう答えるのが一番よいのだろうね」

ふと、彼が笑ったらしい気配がした。微かな振動が、背越しに伝わって来る。カセンは、嬉しいとも嬉しくないとも答えない。

――ああ、それでも。

背負われたユンフォアは、口をつぐんで、彼の背に顔を埋める。

カセンは、自分のことを抱きしめてはくれないのだ、と彼女は訥々と思い知った。

*

湯に浸かり、濡れた衣服から着替えたユンフォアは、茶を飲んでいる最中に、結局、高熱を出して、倒れた。薬湯を飲み終え、今は掛け布にくるまって眠っている彼女を、カセンは眺めやる。

「怒ったり、笑ったり、泣いているのかと思ったら熱を出して倒れてみたり、人は本当に忙しい」

困ったように苦笑しながら、彼はユンフォアの小さな額に自身の掌を重ねた。火照った額は、汗ばんでいるせいか、湿り気を帯びている。

やがて少女の熱っぽい呼吸は、穏やかな寢息に転じた。それを認めてから、カセンはユンフォアの額上から掌を離す。彼は吸い上げた熱を冷ますべく、手を何度か空中で振った。

「それとも、ユンフォアだから忙しいのかな」

カセンは、枕元に佇み、少女の寝顔を覗き込む。

「来なくなったのなら変哲のない日々が、また悠久の如く続くのだろうね」と彼は誰にともなく呟いた。

翌朝、すっかり元の調子を取り戻したユンフォアへ、カセンが持ってきたのは、何とも豪華な衣服だった。布地の色合いもさることながら、彩糸で各所にあつらえられた刺繍はいっそう目を引く。丁寧に重ねられた彩糸が織りなす意匠は細やかで、近づいて目を凝らしても、これが糸で刺繍されたものとは信じ難かった。

呆気にとられ、ユンフォアは言葉を失う。

ようやく口を開いた少女の第一声は、「いらないうって言ったのに」だった。

雨上がりの空は、ひどく澄んでいる。塵一つない空気に、胸がすっとした。

昨雨の名残でぬかるんでいる庭を、ユンフォアは裾を手でたくしあげ、用心深く歩く。一步どころか五歩ほど先を歩いているカセンの背を睨みつけ、ユンフォアはこっそりと愚痴を漏した。普段ならカセンと並び歩いていても歩幅の差など気にならない。だが、服に泥が飛び跳ねてしまったらと思うと、どうしても早く歩くことができなかった。

自ら所望したわけではないが、カセンが衣服を贈ってくれたことに関して悪い気などしない。これほどの衣裳を着る機会などそう滅多に訪れないだろう。袖を通した時などは、知らず心が弾んだくらいだ。

しかし、それとこれとは話が別。足元と衣裳のことばかり気にしていなければいけない現状は、どうもいただけなかった。

ようやく立ち止まったかと思えば、カセンは人の気も知らず「この花だよ」と彼女を呼び招く。ユンフォアは「もう！」と一人息まくと、可能な限り歩く速度を上げたのだ。

花の傍に腰を下したユンフォアは、目を瞬かせる。

ごらん、とカセンが示した花は真珠の粉をまぶしたように白く、俯き加減のその姿は、一度風が吹けば倒れてしまいそうなくらい儚かった。恐る恐る指で俯いた花先を持ち上げてみれば、中央には金飾りを埋め込んだような黄色い花芯が覗く。

ユンフォアは、感嘆を洩らした。

「綺麗だわ。今まで見た中で一番」

「よかった」

二人は、顔を見合わせて微笑する。

ユンフォアが見ている中で、カセンはそっと花を撫ぜた。紺の長い髪が肩から滑り落ちる。

何度も見てきた彼の動作。ユンフォアは、慌ててカセンを止めた。

「待って、カセン。いつもはいいけど今日は駄目。地面が乾いていないのよ？ それじゃ、かがんだ時に髪が泥で汚れてしまうわ」

「何か問題があるのかい？」

「どこに問題がないって言うの？」

呆れたユンフォアは立ちあがると、さっさと彼の背後に回ることにした。

「結ってあげるわ。安心して。こう見えてもうまいのよ。もう少し大きくなったらヒョウリンのも結ってあげようと思っているの」

言うが早いか、ユンフォアは見た目同様指通りのよいカセンの髪を梳き纏めていく。

「ヒョウリン？」と首を傾げた彼を、少女は「動かないで」とたしなめた。

「妹よ。今年の春に生まれたばかりなの」

ふうん、と気のない返事をし、カセンはそれきり喋らなくなった。黙したまま、眼前にある白花を見やる。ユンフォアは、彼の髪を纏めながら、一心に花を見つめるカセンを彼の背中越しに眺めていた。

ふと庭園を囲む茂みが目に入り込んできて、彼女は「あ」と声を漏らす。どうしたのか、と問うカセンに彼女は「何でもなし」と答えた。

ユンフォアは再度茂みに目を向ける。昨日、隠れていたのはちょうどあの辺りではなかっただろうか。そうして、あそこから見えていたのが、まさしくここではなかったか。

不明瞭な疑念は、昨日見た黒髪の女もまた、カセンと共に白い花を見ていたのだと思い至ったところで、しっくりと落ち着いた。地面に頭を垂れているだけの白い花。儚いと感じたのは、知らず黒髪の女を想起していたからかもしれない。

ユンフォアは落ち込みかけた気持ちを追い払うべく、二三頭を振った。すっかり纏め上げてしまった紺色の髪が解けぬよう手で押さえて、彼女はカセンに呼びかける。

「何か布を持っていない？」

「布？」

「そう。髪を留めておくの」

「残念だけれど、持ってないね」

「そう」

先に留め具があるかを確認しておけばよかったと思ったが、もう遅い。ユンフォアは、何か代わりになるものはないだろうか、と辺りを見渡した。

周りには花ばかり。彼女は花群を見つめながら、しばし思考を巡らせる。

「カセン」

「どうした？」

「花を一輪、貰ってもいいかしら。茎を布の代わりにしてみたらどうかと思うのだけれど」

「それは、いけない。一つが消えれば、全てが消えてしまう」

「どういうこと？」

「そのままの意味だよ。とにかくいけない」

カセンにしては珍しく強い口調だった。だから、相変わらず彼の意図する理由が分からなくとも、自身の提案を押し通すことはユンフォアには憚られた。

「じゃあ、どうすればいいかしら」

「なら後で。ユンフォアが帰ってからにしよう」

再び思案し始めたユンフォアに、カセンは何とも軽く答えを返す。それでは本末転倒ではないか、とユンフォアは無然とした。

「せめて地面が乾いてからにしてちょうだい」

「わかった」

「今度来る時は絶対に布を持って来るわ」

ユンフォアは肩を竦める。自分でもよく結えたと感心する紺の髪。「もったいないわ」と、彼女は渋々手を離れた。彼の髪は一切の歪みも残さず、さらりと解けて元に戻る。

何とも不服そうな彼女に、カセンは笑いながら腰を上げた。つられてユンフォアは顔を上げる。

朝の光の中にある彼も、やはり美しかった。カセンが微笑する度に、うっかり見惚れそうになる自分をユンフォアは自覚する。

彼女は、非日常な衣服を纏う自身を鑑みた。鮮やかな色。凝った意匠。外身だけ豪華では、中身とのちぐはぐとした違和感を払拭できない。

「よくて祭の日の子どもだわ」

ユンフォアは肩を落とす。

「とてもよく似合っているけれどね」とカセンは笑んだ。

作ってもらったかいたががあったと言う彼に、彼女は火照り出した顔を慌てて俯かせた。

やがて娘へと成長したユンフォアは、泉から水が溢れ出るように膨れ大きくなっていったカセンへの恋情に、ある日、突然気が付いた。

ユンフォアは、少女の頃と変わらず林の先にある屋敷へ通い続ける。その間、庭園に咲く花は一度として枯れたことがなかった。むしろ、年々増えゆく花は深みを増す。

彼女にとってカセンと共に庭を廻る時間は、何にも代え難いものとなった。多少無理してでも折り合いをつけ、ユンフォアはカセンの屋敷を訪ねる。

――ただ一つ、ある時を除いては。

黒髪の女と遭遇して以来、ユンフォアは、カセンが他にも女と逢瀬を交わしている姿を度々目撃した。最初に出会った女は、数いる存在の一人にすぎなかったらしい。と言うのも、カセンと共にある女は次々と変化した。少なくとも一度見た者を二度見ることはなかった。

ユンフォアは、どうも女に節操がないらしいカセンの様子に強い憤りを覚えた。だが、結局それも彼の容姿を思えば仕方がないのだろうと次第に諦観が胸を占める。

それでも、彼女らというカセンを目にする度、傷つく己を認識するのにはほとんど嫌気がさしていた。

故にユンフォアは、この日もすぐさま彼らに対し背を向ける。幼い日のようにその場に留まるなどという愚かな真似はとてもできなかった。

カセンは、今日もあの二本の腕で彼女を包み込むのだろう。そうして、次に出会うのはやはり同じ女では有り得ないのだろう。

そうやって、幾度も女が変わる。カセンが選ぶ女は、どうやら容姿も出自も関係はないらしい。

ならば、なぜ自分はカセンの目に留まらないのだろう、とユンフォアは釈然としない想いを抱

きながら、屋敷を後にした。

受け入れられれば最後。それきりなのだと解してはいながら、ユンフォアは、そのたった一度が欲しかった。

寄せられた口が花を揺らす。彼の指先になぞられる紫の花弁をユンフォアは羨ましく思った。おいで、と伸ばされた手。彼女は滑稽な嫉妬心を覆い隠して笑み返す。娘は腰を下ろし、男の傍に添った。

「あんまり増えると名を覚えきれないわね」

「覚える必要もないよ。そもそも名なんてものを持ってはいない。花は花でしかないのだから」

「けれど、私はこの花の名を知っているわ」

ユンフォアは、足元に咲く橙の花の名を口にする。視線で問うてくる彼女に「それは名を付けたかった者が付けた名でしかない」とカセンは答えた。

「だけど、名がないと困るわ。だって橙の花と言っても、ここには橙の花がいくつだってあるもの。一体どの橙の花のことを言っているのか、見当がつかないわ」

「ユンフォアは、名があった方がいいと思うのかい？」

「できればね。あった方がいいと思うわ」

ふむ、とカセンは首肯し思案する。

「ならば、ユンフォアが考えてやるといい。次からは、その名と共に飛ばそう」

「どういうこと？」

ユンフォアは首を傾げる。だが、カセンは急にずっと目を細めると、彼女の問いに答えることなく立ちあがった。

「誰だ」

カセンの剣呑な物言いに、ユンフォアはハッとして彼が見据える庭の片隅に顔を向ける。乱暴に掻き分けられた茂み。折れた枝が、音を立てて踏みしだかれていく。

このままでは花まで荒らされてしまう。焦燥にかられたユンフォアは咄嗟に一步踏み出した。

「ここにいなさい」とカセンが彼女の肩を掴み制止をかける。同時に、男は茂みから姿を現した。

見覚えのない男。太刀を腰に携えた彼は、怒気に任せ「リィを返せ」と喉を震わせた。

「ここに女が来たはずだ。一体リィをどこにやった」

「勝手だわ。カセンのせいにするなんて。彼女は自ら望んでここに来たはずよ」

証拠に女はカセンに捕らわれてなどいない。互いに向かい合う二人を目の当たりにしたからこそ、ユンフォアは常と同じくあの日も逃げ出したのだ。

ユンフォアは、茶壺から杯に茶を注ぐ。腹を立てていたせいか、動作がぞんざいになったらしい。勢いよく杯に注ぎこまれた茶がいくらか飛沫をあげた。彼女は杯の一つをカセンに手渡すと、手巾で台に零れた茶を拭く。

「ユンフォアが怒るなんて不思議な話だね」

「カセンが無頓着すぎるのよ。あんなこと言われて放っておくなんて。追い返してしまえばよかったのに」

カセンは微苦笑して、茶に口を付ける。

「気にすることはないよ。彼も気が済めば、そのうち帰るだろう」

そうかしら、とユンフォアは納得のいかない気持ちで茶を口にした。身の内を下る茶は怒りをいくらか和らげる。だが、対して湧きあがった言いようのない不安に、彼女は落ち着かない気持ちになった。

ウジェンと名乗った男は近くの街から恋人を探しに来たと言う。しかしユンフォアにしてみれば、それほど胡散臭い話はなかった。この辺りに街は存在しない。せいぜいいくつかの村が集落のように寄り添っているだけだ。それが、近くの村で生まれ育ったユンフォアが知る事実。

嘘をついているのだ、とユンフォアはウジェンを訝しんだ。だが、そう括ってしまうには彼が語った“リィ”の特徴は先日垣間見た女に酷似しすぎていた。だから、彼の言うリィが屋敷に来たのは間違いがないのだろう。かと言って、彼女が帰らぬ理由をカセンになすりつけるのは間違っても甚だしい。

ユンフォアはそう主張したのだが、見つけるまで帰らないと言い張るウジェンの滞在を、カセンはあっさりと許してしまった。今もウジェンは勝手に屋敷中を探し回っている。

ユンフォアは残りの茶を一気に飲み干した。カセンは不思議そうに彼女を見やる。

「どうかした？」

「やっぱり放っておけない」

空になった杯を卓に置く。ユンフォアは「追い出してくるわ」と部屋を飛び出した。

屋敷中を駆け回ったユンフォアが、ウジェンを見つけたのは庭の中だった。花を乱雑に掻き分けている男の姿に、彼女は血の気が引く。

「——いい加減にしてちょうだいっ！」

ユンフォアは花を荒らす男の手を引き掴んだ。力の限り引っ張ったというのに、彼の腕はびくともしない。けれども驚いたのか、手を止めたウジェンは顔を上げた。

「いないって言ったでしょう！？なのに、どうしてこんなことを……！」

顔を歪めて叫ぶ女に、ウジェンは目を瞠る。だが、彼はすぐさまユンフォアを睨み返した。

「リィを返せ！ 本当は知っているんだろう」

「とっくに帰ったわよ。あれ以来一度も来ていないわ」

そんなはずはない、と彼は言い募る。

「リィは左足が悪かった。街の外れからここまでリィが引きずった跡を辿って来た。足跡は行き一つ分しかなかった。絶対にまだここにいる」

「だから何だって言うの。そんな話信じられない。恋人が心変わりしたのはあなたの責任でしょう。ここに來たってだけで、カセンのせいにしなないで。カセンの庭を壊さないでっ！」

ユンフォアは力任せにウジェンの胸を叩いた。彼は言われて初めて辺りの現状に気付く。薙ぎ倒された花。そこに華やかさは一切ない。

「出て行って。今すぐここから出て行って。これ以上は許せない」

怒りながら涙を流し始めたユンフォアを前に、ウジェンの憤りは殺がれた。彼は、彼女から視線を逸す。

「悪かった。……だけど、まだ帰れない」

ユンフォアは彼を睨みつける。甘んじてそれを受けながらウジェンは踵を返した。

遠く足音。ユンフォアは、その場にへたり込む。カセンの育てた花。無数の記憶と共に、ずっと傍らにあった花。庭の片隅だけとはいえ、こんな姿を見るのは、初めてだった。

無残に広がる花の中、彼女は一人、涙した。

*

ユンフォアが帰路についた後、ウジェンは再び花に囲まれた庭に降り立った。屋敷はすでに隅まで探し終えている。残すはリィがいたというこの場所のみ。

明るい月が庭を照らし出す。足元を覆う花々は淡光に包まれ、どれも奇妙に浮きあがっていた。ウジェンは昼に辿った場所から順に、花を傷つけぬよう丹念に根元を探っていく。柔らかな地面には左足を引きずるリィの特徴的な足跡が克明に刻まれていた。

彼は額に浮きあがった汗を拭う。見渡す限り彼女の姿はどこにもない。最悪の事態を考えていないわけではなかった。ただ些細なものでも、リィがどうなったのか痕跡が欲しかったのだ。

ウジェンは来る日も来る日も、ユンフォアが屋敷を離れる夜に庭を探索し続けた。日が経つにつれ掠れていく足跡。しかし、びっしりと植えられた花々が、吹きつける風から地に残った彼女の足跡を辛うじて守り続けた。

彼は感謝の念を抱きながら、花を手繰り避けた。現れた夜に溶け込む紫の花。見出したものに、男は声を失った。

*

「まだいたの？」

屋敷に着くなり出くわした男の姿に、ユンフォアは顔を顰めた。あからさまな彼女の態度にウジェンは怒るでもなく、ユンフォアの手を掴む。

「待て、ユンフォア。行かない方がいい。早くここから出る」

「何を言っているの？ 離してっ！」

ユンフォアは思い切り腕を振り上げる。しかし、ウジェンは手を離さなかった。「見ろ」と彼は懐から銀細工の耳飾りを取り出す。

「俺がリィに渡したものだ。この庭に落ちていた」

「どうせ彼女がここに来た時にでも落としたのでしょう」

「違う。これがあった場所が問題なんだ。リィがあつた男と会っていたのは、あの辺りなんだろう？」

ウジェンは一方向を指差す。軽い驚きを覚えながら、ユンフォアは彼の示した場所に同意した。彼の指が示した場所は、女が仲んでいた場所と寸分違わなかった。

「あそこでリィの足跡が途切れた」

「そのどこが問題なの。あの場所に立っていたのだから、途切れていて当たり前じゃない」

いや、とウジェンは首を振る。

「前にも言ったが、俺が辿って来た足跡にリィが折り返した形跡はない。それに途切れ方が妙すぎる。普通、自分から動かなくても跡は残る。例えば、手を引かれれば足跡は掠れるし、抱えあげられたとしても足が離れて行く過程で重みが前後どちらかに傾く。その分の跡は必ず残る。これほど柔らかな土の上なら猶更だ。なのに、そういった跡がまるでない。ただ立ち止まった跡があるだけだ。その場で蒸発でもしない限り、絶対にそんな風にはならない。リィは消されたんだ」

真剣に言い募るウジェンから、ユンフォアは顔を背けた。

「……知らないわ。ふざけるのもいい加減にして」

「どうして分からないっ！」

ウジェンは忌々しげに舌を打つ。掴んでいた腕を引き、彼女を引き寄せた。いとも簡単に安定を崩したユンフォアの肩を抱き込んで、ウジェンは彼女に耳打つ。

「いいか、二度とここには来るな。もう誰もリィの二の舞にさせるわけにはいかない。あの男には気をつけた方がいい」

言い終わると同時にウジェンは、ユンフォアを茂み側へ勢いよく突き飛ばした。尻もちをついたユンフォアは、鈍痛に思わず目をつむる。次に目を開いた瞬間、飛び込んできた光景に彼女は「カセン！」と悲鳴を上げた。

すらりと抜き放たれたウジェンの太刀。切っ先は、いつ来たのかカセンの胸元に添えられていた。カセンは冷やかな目でそれを一瞥する。

「いきなさい、ユンフォア。さあ！」

カセンの声の鋭さに、ユンフォアはびくりと肩を跳ねさせる。彼女の足は彼の言葉に忠実だった。ユンフォアの心とは裏腹に、足はもつれながらも走り出す。

娘は息も切れ切れに野を駆けた。林に入ったところで、ようやく失速し始めた足が止まる。肩で息をしたまま、彼女はがくがくと笑う膝に手をついた。

「どうして……？」

ユンフォアは、信じられない思いで背後を振り返る。見えるのは木立ばかり。背筋を冷たいものが這った。

その後、屋敷に戻ろうと道を引き返したはずのユンフォアは、あの日以来、初めて林中で道に迷うことになったのだ。

カセンは、太刀の長さとうジェンとの距離を見比べた。

「これはなかなか難しいね」

ふっと口の両端を歪め、彼は突き出された太刀の腹を指でなぞった。指が触れる先から刀身に緑が芽吹き出す。驚愕するウジェンの前で、太刀は蔦に絡みとられた。

*

歩き疲れたユンフォアは地に座り込み空を仰ぐ。日は疾うに暮れた。木々の合間からは丸みを欠いた月が覗く。この林のどこかにいるのだろう。野犬の遠吠えが耳に届く。

あれほど容易に辿りつけていたカセンの屋敷には、とうとう帰り着くことができなかった。完全に林に迷った今となっては、村への道も分からない。とにかく林外に出ようと思ったが、木々を抜ける前に余力が尽きた。

すっかり冷えた夜気が娘の熱を奪う。ぶるりと身を震わせて、ユンフォアは両腕で自身を抱き込んだ。彼は無事なのだろうか、とユンフォアはぎゅっと目をつむる。まざまざと蘇ったウジェンの太刀。鋭い切っ先がカセンの身体を貫く瞬間を想像して、彼女はおののく。立てた爪が腕に食い込んだ。

「カセン」

青ざめた唇で、彼女は呟く。――と、腕を引っ張り上げられ、ユンフォアは目を見開いた。

肩を滑る紺の髪。端正な顔立ちは、今は険しく顰められている。だが、まごうことなきカセンの姿がそこにあった。それどころか、怪我の一つさえ負っていないことにユンフォアは一気に脱力する。

カセンは崩れ落ちたユンフォアの身体を背負い、足早に林を抜けた。

「どうして帰らなかった。どうしてこんな時間までここにいる。前のユンフォアは、夜の林が危ないと知っていた」

カセンの小言がじんわりと胸に染みる。ユンフォアは彼の背に身を寄せ、俯いた。

切り開かれた野。あれだけ探し回ったと言うのに、屋敷はすぐ傍にあったらしい。月夜の下、こんもりと木が覆う屋敷の姿を目にし、思わず涙が零れた。とめどなく溢れて来たものを留めようと、ユンフォアは口を開く。

「……ウジェンはどうしたの？」

「帰ったよ」

「そう。よかったわ、何もなくて」

「ユンフォア。泣いているの？」

「――泣いてなんかいないわ」

「そのようだね」とカセンは、さも面白そうに喉を震わせた。

木々の先の茂みを抜けて、二人は庭園に辿りつく。咲き誇る庭の花々。暗闇の中でも、その存

在感はユンフォアを圧倒させる。

カセンは花の中を進んだ。背負われたままのユンフォアは、ふと見かけぬ葉を目にして首を傾げる。

「珍しいわ。今回は、花じゃなくて葉なのね。それとも今から花が咲くのかしら」

いや、とカセンはかぶりを振る。鋭く伸びた葉。彼は目を細めてそれを見やった。

「これはずっとこのままだよ。花を咲かすのではなく、花を守るものだからね」

「そうなの」と、ユンフォアは彼の説明に相槌を打つ。まるで太刀のような花だと思った。しばし葉を見つめていた彼女は、ふいと顔を逸らす。それきり、ユンフォアが葉を振り返ることはなかった。

季節は巡る。その間も、ユンフォアは変わらずカセンの屋敷に通い続けた。

だが、彼女の村の者たちは、年頃の娘が毎日のように得体のしれぬ男の元へ訪ねるのを快く思わなくなった。特に心配している両親が持ってきた話を思い出し、彼女は物憂げな気分になる。

何度も通った林と野を、ユンフォアは黙々と足を動かすことで無感動に越えた。

「すごい光景ね」

敷地に入ったユンフォアは、庭に佇むカセンの姿に目に入れながら感嘆した。今では通路すら花に埋められつつある。咲き誇る花の姿は美しいと言うよりも、壮観と言うべき凄まじさを備えていた。

「これじゃあカセンと花、どちらが屋敷の主人か分からなくなってきたわ」

花は屋敷を侵食する。そのうち屋敷ごと花に呑み込まれてしまいそうだ。それも悪くはないのだろう。むしろ両手を広げ、花の中に埋もれたらこの景色はどう変わるのだろうかに興味があった。

いつの間にか向けられていた視線に気付き、ユンフォアははにかむ。

「カセン」

おいで、と彼はいつもの通り、彼女に手を伸ばす。けれど、ユンフォアが動くことはなかった。カセンは不可解さを感じたが、すぐに自ら歩み出す。

向かってくるカセンの足取りは、颯爽と見える割にわずかでも花を踏みしだくことがない。そのことを痛いほど知っているユンフォアは、泣き出したい衝動に駆られた。息を吸い込むだけじゃ抑えきれず、彼女は裾を握りしめて、それに耐える。「カセン」と彼女は、あらん限りの声で彼を呼んだ。

「結婚することになったわ」

「……そうか」

「もうここには来られなくなる」

「そうだね」

「だから、抱きしめてほしいの。最後に」

ユンフォアは、眼前に来た男を見上げた。零れる吐息と共に嬉しげに微笑んだ彼女に、カセンは瞠目する。

「ユンフォア、それは」

何度も娘たちを腕に抱いてきた男は、真っ直ぐと迷いのない娘の双眸に言葉を失った。ユンフォアは、躊躇わず自分から手を伸ばし、カセンに寄り添う。彼の胸に顔を埋め、彼女は「ふふ」と笑いを洩らした。

「初めからこうしておけばよかったのだわ」

「ユンフォア」

「はい」と顔を上げたユンフォアは、カセンを見上げ同意を求める。彼は顔を顰めた。「できない」と言う口にし、カセンの手は彼女を身体ごと引き寄せた。

花ばかりが取り囲む庭の片隅、男は娘を両腕で抱き竦める。

ねえ、とユンフォアはカセンの腕の中で溜息をついた。カセンは「どうした」と問いかけながら、彼女の髪に顔を埋める。

「ありがとう、カセン。ずっとこうして欲しかったの」

それが最期の言葉だった。

カセンの両腕をすり抜けて、娘の足は根へと変わる。胴は茎へ、手は葉へと。そうして、顔容の代わりに、花が綻んだ。

茶褐色の花は口をつぐんで、風に身を委ねる。他の誰にも見向きされないだろうみすぼらしい花。

現れた姿に、カセンは自嘲しながら腰を折った。すべらかな花弁を指の先で慈しむ。花に顔を近づけようとして、彼はそれをやめた。

彼は、ついと顔を持ち上げる。

「迷子かい？」と、カセンは茂みの奥に向かって問うた。

カサゴソと茂みが揺れたのち、おずおずと這い出てきた少女は首肯する。

「途中までは、お姉ちゃんの後をついてきたのよ」

「それで、見失ってしまったのだね？」

少女はこっくりと頷いた。それを認めたカセンは微笑し、一方を指差す。

「まっすぐお帰り。そうすれば、村に辿りつけるだろう」

本当に？ と問うてきた少女に彼は何も答えない。だが、少女は「ありがとう」と無邪気に礼を述べると、示された方向へと走り出す。

徐々に小さくなりゆく少女の姿。彼は再度「まっすぐお帰り」と呟いた。

「もう道は開かない」

カセンは茶褐色の花に視線を落とすと、茎ごと花を手繰り寄せる。

数多の花の中でただ一つ。男は花に薄い唇を寄せると、愛おしそうに花へ口付けた。

【fin.】

Auf die Hande kust die Achtung, 手の甲なら尊敬のキス

「私はどうしようもなく臆病ものなのです」

金簪を黒髪に挿した女は、ひとり掻き合わせた両腕に爪を立てて、崩れ落ちそうな身体をその場に留めた。つい今しがた出会ったばかりの男を前に、彼女の頬に落ちた雫が筋をつくる。それは涙だったのか、それとも降り続ける雨粒の名残だったのか、最早女には分からなくなってきた。

「あの人には、必要ない」

彼女が零し続ける述懐を男は口を挟むことなく聞いていた。否、実のところは耳など傾けてすらいなかったのかもしれない。底冷えのする紺の双眸には何の感情の揺らぎも見いだせなかった。雨を受けて艶と色めく男の真っ直ぐな紺髪は、降り注ぐ先に何があろうと意に介さず地へ落ち続ける雨そのもの。花園の主にしてみれば、このようなこと日常茶飯事に違いない。

だが、そのことが妙に女を落ち着かせた。最期に誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。そして目の前の男は、彼女が吐露し続ける独白に興味こそ示さないものの、静かにそれを許容し続けた。

「ですが、私は恐い。どうしようもなく恐ろしいのです」

見たこともない来世など慰めにもならない。知られぬよう抜け出したのに、いざ自死しようとするれば、ただの肉塊となり果て存在していた事実さえ失うと思うと途方もなく頭の芯が冷えた。いらなくていい。けれども、証拠が欲しかった。

だから、と彼女は面を上げる。暗い雨が一人の女の頬を打った。

*

幼少のみぎり、ソムドが教師の目を縫い勉学から抜け出す度に、母は息子のふくらはぎを仕置きとして鞭で叩いた。

よいですか、と言う母の脅し文句はいつも変わらない。

「あなたのような悪い子は、森の外れの花番に花に変えてもらわねばなりませんね。お婆様のお姉様はあなたと同じで悪い子だったから、花番に連れていかれてチナジュにされてしまったのですよ。あなたのところにだって、すぐにやって来てくれるでしょう。そうしたら、枯れ草にでも変えてもらって、火を熾す時にあなたと一緒に燃やしてもらいましょうか」

随分と歳を経た今では母のそれがただの戯言だと分かっている。しかし、まだ本当に幼かったあの頃は、会ったこともない親戚が道行く人に当然のように踏まれる雑草——チナジュになったと聞かされ心底恐ろしかった。怒られた晩は布団にくるまりながら、もしや花番がやって来はないかと気が気ではなかったのだ。

門の傍に突如現れた白い花。

ソムドは、それが夢幻でないと言って愕然とした。

今朝がたとど雨を吸い込んだ地面はぬかるみ、崩れ落ちた膝が泥に沈みこむ。木の葉から落ちてきた雫が俯く白い花を弾いた。震えた花に指をかけて面を持ち上げると、花びらを束ねる中央には黄色の花芯が鮮やかに色を添える。

花びらがひとひら、零れた。周りの音を吸い込みながら地面へ落ちた破片。息を呑んだソムドは慌てて花から手を離す。すると続けて二片、三片と花びらは儂くほどけ落ちた。

「ジへ」

ぬかるみに溜まった水に浮かぶ幾枚もの白い花卉。信じられぬ思いにとらわれて、ソムドは薄い花びらを丁寧に摘み上げた。それでも拾う際に指先についてしまった泥が清らかな白を汚し、花びらの薄さは簡単に潰れて縮れる。

ソムドは全ての花びらを手に握り込むと、屋敷の中に戻って返した。先日、家人の多くに暇を出した屋敷内はがらんとしている。彼は入用なものだけを手早く皮袋に詰め込むと、外套を引っ掛けて屋敷を飛び出した。

間に合ってくれ、と願いながら、既に何も間に合っていないことに、ソムドは奥歯を噛み締める。

人が花に変わるなど、誰が信じよう。

ソムド自身、十に上がる頃には虚言だと断じていたし、早くに死んだ母が仕置きの度に言っていた口癖を今日まで思い出すことはなかった。

だが、俯いた白花を目にした瞬間、ソムドは数日前に家を出た妻であると悟った。疑う余地すらない現実として彼の目には映った。

白花の黄芯がソムドの脳裏でさやと揺れた。妻の黒髪によく映えていた金の簪が音を立てて姿を変える。あれは行き遅れと家族に煙たがられていた娘が、婚姻の際に唯一親から手渡されたものだった。

卓に視線を落とし、顔を伏せた彼女の姿が、白花にぶれて重なる。

実家に帰ったものと安心していただけが甘かった。あの親が、役立たずとなった娘を迎え入れるはずがなかったのだ。

ソムドは仕事仲間から能面と揶揄されていた顔を歪める。顔を打つ風は温度がなかった。焦燥に駆られて足が速くなる。

一月後に出されるはずだった都の関門を、彼は自らくぐり抜けた。

宮に仕官していたソムドが同僚に嵌められたのは、六日前のことである。

蒼白し切った部下は、部屋に入るなり己のしくじりを詫びた。それでソムドはおおよその事態を呑みこんだのだ。国を動かすほどでなくともそれなりの地位についていた彼は責を問われて僻地の閑職へと飛ばされることになった。このやりようによく加減辟易していたソムドは、遅れて現れた政敵に逆らうでもなく「諾」と頷いたのである。

元々、早くに父母を亡くしたソムドは、近くに頼る親戚も後ろ盾もない。ようやく宮仕えでき

るようになる頃には金も底をつき、大きいばかりの屋敷と由緒だけはあるという家名しか残って
いなかった。

唯一、配属先の上司が優れていたことは、彼にとって救いとなった。傍から見れば随分と遠回
りながらも、ソムドは着実に頭角を現していったのである。

だが、今となってはそれも失った。

丸三日の拘束後、解放されたソムドは閑散とした屋敷を前にほっと息を零した。迎えに出てき
た妻の顔は白く、血の気を失っていたが、自分になり変わり既に家人たちによく計らってくれた
らしい。

涙ぐんでいる妻に無言で頷いて、ソムドは戸口をくぐる。腰を落ち着かせた彼の為に、ジヘが
手ずから汲んだ茶は濃すぎたが強張った身体を温めるには充分だった。

ソムドは茶杯を卓に置くと、妻に呼びかけた。ちょうど自分で注いだ茶の苦さに渋い顔となっ
ていたジヘは慌てて姿勢を正し、夫に向き直る。

「お前は家に帰りなさい」

「え？」

「幸い子にもまだ恵まれていない。今なら義父も受け入れてくれるだろう。帰って他の男を探す
といい。ここにいるよりは、よっぽどお前の家の役に立つ」

理解を示し始めた茶眸が徐々に見開かれていく。「そんな」と非難に震えた唇を、ジヘは歯で
噛んだ。

茶杯から浮かぶ湯気がよりべなく空間を彷徨う。

ぎゅ、と茶杯を両手で握りしめ、ジヘは卓に顔を伏せた。

「――私、は、必要ありませんか」

しがみつくように絞り出された問い。掠れきった声音に、ソムドは肯定を返さなかった。

無言で閉じ切られた部屋の重苦しさが、音を発することを躊躇させた。ソムドは静かに茶杯を
引き寄せる。

つられて面を上げたジヘは、一度取り零したように笑うと席を立て駆けだした。奥で勢いよ
く戸の閉まった音がする。

ようやく音の蘇った世界に、ソムドは息をつくと茶で口内を湿らせた。

ソムドが寝室へ向かう時分になっても、ジヘはまだ泣いていた。寝台にうつ伏せて、すすり泣
く声が痛々しい。ソムドは彼女に声をかけることができなかった。肩を抱いて、背を擦り、髪を
撫ぜ、宥めすかす。そういったことが何ひとつ、彼にはできやしなかった。

寝台の中に潜り込んだソムドは、妻に背を向けて目を瞑る。

明け方、ジヘが寝室を抜け出したことにソムドは気付いていた。それでも、彼は素知らぬふり
をして暗い臉の裏で、戸が閉じる音を聞いたのだ。

金簪が揺れて、しゃらと奏を鳴らす。

ジヘとの婚姻は名しか知らなかった遠い親戚が持ち込んだものだった。近頃、とみに力をつけ

つつある商家の娘。これから取引先を広げようと意気込む彼女の家にしてみれば、まだ下級官僚とは言えソムドが持つ貴族の名はさぞ魅力的だったのだろう。ソムドにとっても彼女の家の持つ財力が廃れた家を再び盛り立てる為に必要だった。

線の細い娘だと思った。肖像画以外の彼女を初めて目の当たりした時、ソムドはそう思った。商家の豊かさを象徴する絢爛な花嫁衣装。貴族の奥方に見合うよう全身を飾り立てられている彼女は鮮やかな衣装を幾重も纏っていた。だからこそ袖の合間から覗いたジへの手がやたらと頼りなく見えたのかもしれない。

招待客へと早々に顔を売りに行った両親に置き去りにされ、娘は広間の隅でぼつねんと佇んでいた。傍に向えば、彼の存在に気付いた娘は、見惚れるようにソムドを眺め、次の瞬間、羞恥に顔を伏せる。ソムドは娘に手を差し伸べた。娘は顔を明るくさせて彼に笑む。おずおずと掌に重ねられた手を、ソムドは広間の中央へ導いた。ソムドは、彼女に恋をしたわけではなかった。だが、失くして久しい温もりを彼女の掌は確かに持っていた。

頬を紅潮させてころころと表情を変えていた娘は、いつの間にか戸惑うような、はにかむような、一步身を引いた表情しか見せなくなった。それは、ある意味年齢にともなった落ち着きとも言えただろう。けれども、いつも緊張に身を強張らせているようにも思う。そうさせたのは自分なのだと、気づかぬほどソムドは愚鈍ではなかった。

ああ、それでも、と彼は思う。

花番がいるという花園の場所をソムドは知らなかった。どこか森の端にあるのだ、と語った母の言葉を頼りに、森という森を渡り歩く。

出会わせた乗合の馬車に乗り、金が底をつく、ただひたすらに歩いた。すれ違う人には、花園の話聞いたことはないか、と逐一尋ねた。ジへの白い花は、ソムドの行く道の先々で咲き綻んだ。

皮の剥けた踵が血を滲ませて、沓の中で悲鳴を上げる。あまりの痛みにソムドは沓を脱いだ。はじめはよかった。解放された足に外気は心地よく、踏みしめる草は裸足の彼に優しくかった。

だが、その内に、地面に転がる石砂は、剥きだしの足裏を傷つけた。ソムドは衣服を割いて足に布を巻く。沓を捨てたことを悔やんだが、最早どうしようもなかった。

そより、そよ、と葉擦れが清らかに彼の耳にささやく。森の隙間から零れる陽光は、茶けた大地の影を揺らした。

この頃になると、ソムドにはもう面を上げる気力さえ潰えていた。落ちくぼんだ目で、繰り出さねばならない自身の足先だけを見据え続ける。幾日も、酷使し続けた足はひきずるのにも重く、心の蔵が跳ねる度に痛みが頭に響いた。

ただ、探さなければ。見つけなければ。どうしても、もう一度。あの取り零したように笑う、その姿が、散ってしまってよいはずがなかった。

そより、と。白い花は風に攫われてしまいそうに茎をしならせる。目の端で花の行方を追った途端、石に蹴躓いてソムドは倒れた。胸を打った彼は、強く咳き込む。明滅する世界の中で、立ち上がろうと引き寄せた腕は、砂を擦るだけで持ち上がりはしなかった。

ソムドは呻く。

舞い降りた鳥は、彼の鼻先で地べたに散らばる木の実をついばんだ。

――ああ、ほら。

『見てくださいな』

庭先に出たジへは控えめにソムドの袖を引いた。

「ことりか」

目の悪いソムドは、目を眇める。

森の緑を宿した小鳥は、畳んだ羽を器用に広げた。

ざわりと森が騒ぎ立てる。擦り切れた男の衣を、風は無造作にはためかせた。

「おや、少しばかり遅かったかな」

葉を揺らして響く女の声は、逆らいがたき軽やかさを持ってソムドの耳の底に落ちた。

誰、と問うことは許されなかった。切れた唇はやわと震えるだけで声を出す力を失ったようだった。せめて、正体を見極めようと頭をもたげたかったが、臉すら自由に持ち上がりはしなかった。

「いや。まだ息はある」

生臭い息が、顔にかかる。ざらりと額を擦っていったものは、恐らく獣毛であった。唸りに似た、女のものとは違うその声は、女に問う。

「どうする」

女はささめきながら笑った。まるで風と変わらぬ響きだった。それが答えだったのだろう。ただ一言、女はソムドに語りかけた。

「起きなさい」

女の手が、ソムドの頭に置かれる。

呼応して巻き起こった風が、ふわりとソムドの上半身を持ち上げた。重かったはずの臉は自然と開きだす。はっきりとしてゆく視界の中で、髪の高い女が銀毛の獣を従え、立っていた。

「名も知らぬ来訪者よ。よくぞ『森』まで辿りついた。あなたの労を私は労おう」

女は微笑んで、ソムドに手を差し出す。すっきりと伸びた美しい掌。温度のないように思えるその手は、ひどく澄んでいた。

ソムドは、眼前に立つ女を仰ぎ見る。あらゆる木々が、彼女の周りを取り巻いていた。

「森に住む、知恵の魔女」

掠れたソムドの声につられて腕を下した女は、意外そうに首を傾げる。

「知恵の名で呼ばれるのは、久しぶりだ。最近はずっとばかり呼ばれていたから」

はるか遠い昔から、変わらぬ姿であるという女。人知を越えた力を持つ森に住む者に出会えさえすれば、どんな願いをも叶うと言う。

ソムドが探している花園よりもはるかにまことしやかに人々の口に上り、誰もがいると信じて疑わなかった存在。ここに来るまでにも、何度も聞いた。

魔女は口を開く。

「いいよ。聞こうか。あなたの願いを」

ソムドは息を飲んだ。当然のように与えられた権利に、彼は平伏し、額を地面に擦りつける。

「――花園を。花園の在り処を探しております」

「花園？」

「花に変えられた妻を取り戻したいのです。花番の居場所を教えてください」

「花番」

魔女は含むように、繰り返した。ソムドは、顔を上げる。魔女が知らなければ、もう他に行くあてはない。ぎり、と目頭に力を込める。一挙一動も見逃さぬように。

魔女は真横に佇む銀獣に視線を逸した。銀獣は、はたりと尾を振る。人間と変わらぬ仕草で嘆息をして、銀獣は魔女に答えを明かした。

「鳶のことだろう」

「鳶の？」

「前につくったろう。これが言っているのは恐らく『森』の南端にある花田のことだ」

「ああ」

得心したらしい魔女は、目を眇めた。眼差しを遠くにおいて、「そうだった」とおぼろげな表情を浮かべた魔女は頷く。

人間よ、とソムドに呼びかけたのは、魔女ではなく銀獣だった。

「あれがつくったのなら、お前の妻は自ら望んだのだろう。花になりたいと。でなければ、あそこへの道はそうたやすくは開かない」

「それでも、『森』への来訪者よ。あなたは、花田に行くことを望む？」

重ねて魔女は問う。

ソムドは、首肯した。是、と口を開く。

風は巻き起こった。森の木々すべてを掻き崩して、強風が吹き荒れる。ソムドは、思わず腕で顔を覆った。胸を圧する威圧感は、息をすることもままならない。「そう」と軽やかに声が耳を打った気がした。「どうか」と彼は、息を吸う代わりに願いを吐き出す。

次の瞬間、ソムドは地面に叩きつけられた。

衝撃が身を襲って、ソムドは蹲った。口内を切ったらしく、舌に沁みだした血の鉄くさい味に、知らず吐き気を催す。せりあがってきた異物感を飲み下して、ソムドは茶けた地面から顔をもたげた。

敷き詰められた花の色。風の流れに轍を広げてざわめく花々に、ソムドは目を瞠った。鼻につく芳香に引かれるがまま腕をついて、立ち上がる。ソムドは、よろめいて身体を動かした。

花園の端に立っていた美しい男。ソムドは、彼に向かって前のめりなりながら足を繰り返す。紺の髪を腰帯まで流す男は驚いているのか、ソムドを見たまま微動だにしない。するりと風が紺髪をさらって、寸の間、紺髪が空に流れた。冷水にさらした染糸に似て、透明さの中に感情を沈める男の双眸は、驚きの割には冷静に自分へ向かうソムドの行動を見守る。

ソムドは両腕を伸ばして、紺髪の男の衿を引き掴んだ。

「花園の――いや、花田の主人か」

「どうやってここへ？ 道を開いた覚えはないのだけどね」

紺髪の男は眉を寄せる。するりと宙を滑らせた男の指の先で、伸びてきた鳶がソムドの腕を絡

み取った。ソムドは驚愕して男の服から手を離すと、鳶を引きちぎる。だが、次から次へと伸びてくる鳶は、ソムドを逃しはしなかった。

脚も腕もすっかり鳶が巻きついて、ソムドは動きを塞がれる。痛い程に肌に食い込む鳶に、ソムドはざらつく息を浅く吐いた。花田の主は冷やかに紺色の双眸を煌めかせ、口を開く。

「なぜここへ？」

「魔女に、知恵の魔女に頼んだ。ここに来ることを」

花田の主は考える素振りを見せた後、思い当たる節があったのか「ああ」と得心した。

「愛し子に願いをかけたのだね？」

そうか、と主は頷いた。まもなく興味を失くしたように、彼は咲き誇る花々の中へ踵を返す。長い紺髪は、裾と共に翻った。するりと拘束を緩めた鳶から、ソムドは投げだされる。したたか腰をうったソムドは、それでもすぐに立ち上がって、花田の主に追いつがった。

「待ってくれ。返してくれ。頼む。お願いだから、妻を、ジへを。元に戻してくれ」

袖を掴まれた花田の主は、膝をつくソムドを見下ろす。

「できないよ。君の望む方法は与えられていない。君の言う人間がここへ来たのだと言うのなら、その者は君がここへ来ていることを知っているだろう。君が連れて帰りたいと望んでいる今も、その者は戻りたいとは望んでいない。望んだのならば、自分で戻っているはずだからね。花は本来、強制されるものではない。自由に根付き、咲き、実り、枯れる。それが理。戻る、戻らないはその者の意志だよ」

「まさか」

ソムドは身を震わせた。溢れ返る花の香に酔うようだった。縋り、求めた答えも、無情なものでしかない。戻らない。本当に遅すぎたのだ、何もかも。

「もしも」

絶望するソムドに、花田の主は言った。憐憫すらこもっていない声は、淡々と味気なくソムドの耳を通り抜ける。

「君がその花を連れていきたいと望むのなら、連れていっていいよ。そうしたら、その花は、もう君の元でしか咲かないだろう。どちらでも好きにするといい」

頭をもたげたままのソムドの前で、花田の主は今度こそ踵を返した。遠のいていく背を、伸びやかにそよぐ紺色の髪を、ソムドは呆然と眺める。

ざん、と風は吹いた。荒い風の割に、地上を埋め尽くす花は、柔らかにそよぐだけだった。同じ種が重なるでもなく乱雑に植えられた花々は、思い思いの場所で花卉を広げる。

「すまない」

ソムドは、顔を覆った。意味のない謝罪を繰り返して、彼は身を折って蹲る。魔女や花田の主が言ったことが本当ならば、花と化したいと望むほどにジへを追い詰めたのは、紛れようもなく自分なのだ。夜通し、声を殺してすすり泣く。彼女の嘆きを聞きながら、何もしなかった自分のせいなのだ。

しゃらん。はにかむ度に顎を引く癖。その度に、彼女の金簪は、控えめに揺れた。今ではもう悲しんでいるようにしか聞こえぬその音を、ソムドはありありと思い出して、空を仰いだ。

もういくら蹲っていたのか。明るかった昼の空は、夜の暗闇を通り越して、朝を迎えようとしていた。花田一帯を取り囲む木々が、白んだ儂い朝日を浴びて、さやさやと光を弾く。

「ジへ」

ソムドは、呟いて辺りを見渡した。

立ち上がって、歩き出す。探さなければ、と思った。探さなければ。どうしても。このままでいいはずがないという思いは何度考えても変わらなかった。ジへが戻りたくないと思ふのならば、そのままでいい。強制する権利をソムドは持っていない。ただ、ソムドはジへを前にして謝らなければならないのだ。彼女の在り処を知りもしないのに、自分を囲う花の中でいくら謝っても、それはジへに届かない気がした。

ソムドは、花々の間を辿る。足元に咲いた花。掻きわけようとして、ソムドはやめた。ジへが花に変わったのだ。ならば、ここに咲く花もやはり誰かであったのだろう。彼は引っ込めた手を躊躇いながらも伸ばすと、そっと一輪ずつ確かめていく。

「ジへ」

ソムドは呼んだ。

答えが返るはずもない。しゃらん、と音が聞こえはせぬかと耳をそばだてたが、やはり無駄であった。

ひとつ、ふたつ、とソムドは、花を確かめて回る。

「ジへ」

白い花。中心に一つ、金飾りを持つ。道中、彼の行く先々に咲いた花の俯き加減までも、ソムドははっきりと記憶していた。それほどまでに、彼はここに辿り着くまでジへの花を見かけた。導かれるように、ここまでやっと来れたのだ。

「ジへ」

ソムドは、妻の名を呼ぶ。

朝日に照らされ、そよいでいたはずの風は、不意に動きを止めた。彼は額を流れた汗を拭う。辺りは、花の色ばかりが浮かぶ。こぼれそうになる嘆息を、ソムドは堪えた。

さや、と花々が一斉に揺れる。ソムドは目を丸くした。風もないのに波をつくり、一方向へ流れていく。絶え間なく、花は波をひとつの方角へ寄せて、流れた。

風もない静まり返った場所で、花だけがざわめく。

ソムドはそっと、足を花々が示す方へ向けた。呼ばれている気がした。ジへではなく、周りの花々に。こっちだ、と、彼を手招いて教えてくれているとしか思えなかった。

「ジへ」

彼は駆けた。急ぐあまりに花を踏まぬようと気遣いながら、ソムドは必死に駆けた。

揺れていた花が、動きを止める。あわせてソムドも足を止めた。

こわごわとした思いで、ソムドはその場にかがみ込む。

俯いた小さな白花。

彼女の引っ込み思案な性格を現すかのように、白花は他の花々の下、身を隠して咲いていた。

「ジへ」

ソムドは、白花を両手で囲う。抱きしめることはできなくて、上半身を折った彼は、硬く目

を瞑った。

*

さやさやと、昼間の光を浴びる花は、静かに揺れる。

しゃらん、しゃらん、と金簪が風の音に混じり響いた。

花園の主は、花の中、座り込んでいる黒髪の女に目を向けた。

紺髪の男に気付いた女は、顔を上げると、居心地が悪そうに微笑する。きっとまたこの主は、女の言葉に耳を貸す訳ではないのだろう。それでも、彼女はここへ来た時と同じように、彼に独白めいた言葉を連ねた。

「私はどうしようもなく臆病ものなのです」

彼女は、昏倒してしまった夫を膝に抱き、その髪を愛おしげに撫ぜる。

「もう三年もこの人と一緒に暮らしているのです。だから、知っていたのに。この人は、いつだって、何も言わない。宮を追い出された時だって、一人で全部背負ってしまったのだと、彼の部下が私に教えてくれました。わかってた。私を帰そうと彼が考えた理由も本当はすぐに気付いてしまった。全部。何も言わないで勝手に決めてしまっていた。私はかなしくて、どうしようもなくって。だって、私は彼が役に立つからと傍にいたわけではなかったのに」

ほろり、と女は苦笑を漏らす。この人はちっともわかってくれないのだもの、と彼女は、夫の髪を指先で辿った。

「だから、困らせてやろうって。一生後悔すればいいって。だけど、死ぬには恐かった」

彼の頬にこびりついた泥を、彼女は丁寧に拭う。

「結局、私はいつもこの人と違って決心が中途半端で。彼が必死に探してくれていると知って戻りたいと思った時も、私はどうしようもなく恥ずかしくって、私はこの人の為に戻ることでできなかったのに」

なのに、と女は目を伏せる。睫毛を瞬かせたのと同時に、雫が弾けた。

「この人は私を見つけて諭し続けた。謝るだけでなく、ずっと。恥ずかしくて戻れない私に戻っていいと」

一週間もですよ、女は涙を拭って、花園の主に笑いかけた。

紺髪の男は、口を開かない。それでいい、と女は思った。

「帰ります、一緒に」

女は夫の頭を膝に抱き抱えたまま、晴れやかに主へ告げた。

花園の主は頷かなかった。ただ、男の指の爪に入り込んでいる泥に目を向ける。その視線につられて女は、男の手に手を伸ばす。今まで土など触ったことすらない癖に、まるで農夫のように土まみれになってしまっている手。擦り傷ばかりがついた甲。

何も口にはしない。いつも。けれど、彼は行動するのだ。当たり前のように。そうして探しに

来てくれた。

「ありがとう」

ジへは腰をかがめて、眠るソムドの手の甲にひっそりと口を寄せる。彼女は溢れだした涙を隠すように、そのまま夫の掌を額に押し抱いた。

風が吹く。しゃらり、しゃらり、と金簪を鳴らし、辺りから消えた白い花びらを巻き込んで。

そうして、二人は彼らが望んだ生活へ共に帰った。

「おや、本当に死んじゃったよ」

ウネは年老いた夫の死骸を見下ろした。彼が息を引き取ったのはたった数秒前のこと。長年連れ添った相手だと言うのに大した感慨もない。それよりも、さて弔いの用意をせねばならぬ、と老婆は重たい腰を上げた。幾許か離れた村にある共同井戸へ清めの水を汲みに行くがてら、親類の家を訪ねつつ、行き交う親しい人々にも夫の死を知らせて行く。

結局、汲んだ水を家まで運んで貰ったウネは、助けてくれた村の若い衆に礼を言うと、水のたっぷりに入った桶に、ざぶりと布を浸した。寝台に横たわる夫から、彼女は遠慮なく掛け布を引きはがし、よく絞った布で丹念に身体を拭き清める。病を得てからは驚くほど痩せ細っていった夫。歳のせいか、骨に張り付いているのは皮というよりも皺ばかりだ。

「やだねえ。あたしも死ぬ時はこんなんかしら」

最後に夫の棒きれに似た腕を交差させ、一通りの仕度を終えたウネは寝台の端に腰かけると、ふっと息をつく。一間だけの家。ウネの目線の先で、がたのきている扉がきいこきいこと音を立てた。

弔い火が作り変えた灰っぽい骨は、早速墓へと埋められる。村からやって来た娘夫婦に弔問客との宴を任せて、ウネはせっせと墓の周りに花を植えた。

「さて、あたしはどうしようかね」と、彼女は手の皺に入り込んだ土をこすり落としながら、質素な墓の前に座りこむ。

稼ぎ手はなし、子どもか孫までもが既に家を出た。いちいち面倒を見てやらねばならない煩わしい存在もいなくなった。

一人娘のノギは、我が子ながらよくできた娘だ。彼女の夫も、ちよくちよく尋ねてきては嫌な顔一つせず老人の詮無い長話に耳を傾ける優しい男である。彼らは、きっと年老いた自分を心配し、一緒に暮らそうと提案してくるだろう。しかし、ウネは申し出を断るつもりでいた。あの夫が死んだくらいだ。自分も持ってあと二三年かそこらに違いない。ならば、娘夫婦を煩わせるよりも、実のない時でも独りひっそりと過ごした方が幾らかマシである。

さて、そろそろ行くか、とウネは立ち上がり、裾汚れを払った。今日はどうやら上空の風が強いらしい。空を見上げれば、雲が次々と形を変えながら流れていた。

まったく今日に限って、どこぞで出会ったような空だと、彼女は物思いにふける。瞬時に、昔見た花畑が脳裏をかすめた。花畑と言っても、よそでは雑草扱いされるちんけな野花ばかりしかなかったが。

老婆は整えたばかりの墓に目を落とす。

「あー、あー。分かっちゃいたけど、ほんっと自分勝手な奴だよ、あんたは」

べしり、と板でできた墓標を叩けば、痛むのは皺がれた己の手ばかり。腹の立ったウネは、今度は墓標を足で蹴った。不格好に曲がった墓標を前に、彼女はようやく溜飲を下げた。

ぶわりと大風が巻き起こる。同時に砂が目に入り、ウネは腕で目を覆いつむった。

次第に凧いでいく風を肌で感じながら、風が収まるのを待つ。その最中、そよりと流れてきた甘い芳香に、彼女は薄らと目を開けた。

おや、とウネは頭を捻る。

「あんなところに林なんぞ、あったかねえ？」

墓群のある丘野の端に、こんもりと木々が生い茂った場所が見える。林と呼ぶにはちいと小柄すぎる気もするが、その在りようは雑木林そのものだ。ウネの足は自然とそちらへ向かっていた。好奇心に身を任せ、無鉄砲に突き進む若さは既に持ち合わせていない。だが、引きつけられるように彼女は立ち並ぶ木々の中へ踏み入れた。

芳しい香りが強さを増す。胸を圧する芳香の中、ウネは高い木立の向こうにあった茂みをも越えた。チカリと瓦屋根が陽光を照り返す。眩しさに、彼女は目を眇めた。

光に慣れゆくにつれ、彼女は徐々に顔を押し開く。次いで、飛び込んできた無数の花たちに、ウネは息を呑んだ。

眼前一体に広がった花々。混じり合った色味の前では、全体像を捉える事が出来ない。老婆は信じ難い光景に目を回しそうになりながら、花畑の合間を進んだ。

「花に望みをかけにきたのかい？」

背後から声をかけられ、ウネはギョッと振り返る。

「……こりゃまあ、たまげた」

はあ、と呆気にとられ彼女は男を見上げる。背の高い男だった。それも恐ろしく顔立ちのよい。長い紺色の髪は美しく背に広がり、落ち着いた佇まいに反して、人を引きつけてやまない魅力があった。もしも若い時分に、この涼やかな紺色の目で見つめられていたら、ころりと恋に落ちてしまったことだろう。長生きはしてみるもんだねえ、とウネはしみじみと思った。

けれど、ウネにはそれより気になることがあった。彼女は慎重に男へと問いかける。

「花に望みをかけに、と言ったね？」

「言った」

「それは、一体どういうことだい？」

「それを、一番よく知っているのは君だろう？ 迷い込んだわけでもなさそうだ。だから、ここへの道が開いた」

それは、と老婆は口ごもる。だが、「花になることを望むのだろう」と言った男の言葉に、彼女はみるみる目を見開いた。「あんた、人の心が読めるのかい！？」と驚くウネに、「まさか」と男は淡然と答える。

ウネはしばらくの間しげしげと男を見据えたのち、「はあああああ」と投げやりに息をついた。

「ああ、その通りだ。そうならいいと思った。ただの年老いた婆の馬鹿げた妄想さ。笑いたければ笑えばいい。せめて娘であったならばそういう望みも叶っただろうが、この老婆には枯れ草がお似合いさね」

「ここにあるものたちもすべからくそう望んで花となった。花に変えようと思ったが、枯れ草を望むのなら、そうしてもよい」

「――なっ！？ 待て待て待て。花に変えるって、冗談かい？ ちょっとお待ちよ」

ウネは片手で男を制すると、もう片方の手で額を抑えた。

「どういうことだい？」と問えば、「そのままの意味だが」と返ってくる。

「嘘じゃあ、ないんだろうね？」

「君は、なかなか疑い深いようだね」

「疑う疑わないの話じゃないよ。だあれが人が花に化けると言われて信じるかね。ちょっと顔が綺麗だからって、婆をおちょくるのもいい加減におし」

「君が望んだことだろうに。けれど、迷いがあるのなら帰った方がよい。帰り道ならば、示してあげよう」

言うなり、ひらりと翻りかけた男の裾を、ウネは慌てて引きとめた。「本当なんだね？」と彼女は、この不思議な男の双眸を覗きこむ。

「本当にこの婆でも花に変わることができるんだね？ ここにある花みたいになれるんだね？」

「さっきそのように言わなかっただろうか」

男は首を傾げる。さらりと広がった紺色の髪を、ウネは思いっきり引っ張ってやりたいと思った。

「ああ、ああ。言ったともさ、言ったとも。この皺がれた婆をすっかり綺麗な花に変えてやるとね。だけど、嘘なら早く嘘と言っておくれ。あんまりあたしに夢を見させないでおくれ」

「嘘は言った覚えがないよ。花になることを望むのなら叶えよう」

「あんたは花の神かなんかかい？」

「人間がそう呼ぶ時もある」

「そうかい」

ウネは、皺でたるんだ顔を覆う。「……そうかい」と彼女は呟いた。夢ならば夢のまま死んでいるといいと願った。

どうしても果たしたかった約束があった。だけれども、それは果たせなかったから、“果たしたかった”のまま終わってしまっていたのだ。

雲の流れが速い日だった。本当はもうずっと昔に忘れていてもおかしくはなかったような光景。風が草はらに起こす漣の形を、過ぎゆく雲が落とす黒い影を、ウネは嘘みたいに思い出せる。

野の花が咲き乱れる、あの日あの場で、ウネは夫に求婚されたのだ。正しくは求婚させたと言ってもいい。あまりにも長い時間、共に原っぱに座っていた夫が、ごによごによと横で口ごもり続けるから、独語にも満たない彼の言葉が聞こえていたウネは、はっきりしろ、と彼の肩を思い切り引っ叩いた。

「け」と、彼が発した途端、ウネは満面の笑みで頷いてやった。「当り前だろう？」と。

今考えても、不甲斐ない男だったと思う。大して格好よくもなかったし、器用でもなかった。

どうしてどこにそんなにも惚れたのか、自分でも未だに分からない。だけれども、結婚を承諾した直後、この世の全てを手に入れたかのごとく嬉しそうに抱きついてきた男を、ウネは心の底から愛おしく思った。

「なあ、俺たちはきっと死ぬまで一緒にいよう。おっ死ぬ時は、花畑でも探して、そこで一緒に果てるんだ」

これから結婚すると言うのに、なんと遠い先の話をするのだとウネはあの時笑った。

「今日みたいな花畑で死ぬのかい？」

「ばっか。俺たちの最後を飾るんだぞ。こんなの目じゃないくらいすごい花畑さ！」

それは楽しみだねえ、とウネはくすくす喉を振るわせながら、彼を抱き返した。楽しみだねえ、一体どんな最期を辿るんだろうねえ、と。約束するよ、あたしはあんたと花畑で死のう。ここよりももっと、いっとう綺麗な花畑で眠ろう。

約束するよ、とさらに言うと、見上げた彼の顔は優しくとろけていた。顎をとられて唇が触れ合う。何度交わしても、彼の口付けはたどたどしかった。多分、あの頃は、ウネの方がうまかったように思う。

幸福でどうしようもないほど胸が熱かった。なぜならば、彼は最期まで共にある未来をみてくれていたのだから。もちろん、連れ添ったこの数十年、何度離縁してやろうと思ったかもしれない。いけすかないこともたくさんあった。だが、一緒にいることで手に入れた幸福も、嫌なものの数百倍――いや、数に置きかえられないくらいにあった。それは、愛されているのだと実感したあの約束から始まったのだ。

ねえ花の神様、とウネは男に呼びかける。

「もしも花になった時には好きな場所に咲くことができるだろうか。窒息するくらい花で埋もれさせてやりたい奴がいてね」

ウネは緊張の面持ちで、男を見上げた。この美しい花園で二人果てることができればよかったが、今となってはもう叶わない。

果たして男は「是」と頷いた。

「望むのならば飛ばしてあげよう」

「飛ばす？」

「どうせここにある花は例外なく外界へ送り出すからね。君に望むところがあるのならばそこまで飛ばしてあげても構わない」

「一輪だけじゃ足りないんだ。たくさん、たくさんいるんだよ。この世でいっとう綺麗な花畑にしまきゃならないんだ」

「君の望むところに君の花畑をつくれればいいのだね？」

ああ、とウネは感動に打ち震えた。

「よろしく頼むよ。どうかあたしを綺麗な花に変えておくれ。約束の代わりに、どうしても花畑がつくりたいんだ」

だって、あいつは勝手なんだ、とウネは顔を歪めて、いひひと笑う。だから、あたしも勝手に

するよ。

――ああ、もうこりゃだめだ、と痩せ細った夫は言った。

「あんた、そんなことばっか言ってるから、今にも死にそうな目にあってるんだよ」

はぁ、とウネが呆れて言ってやれば、「だってな、ウネ」と夫は寝そべったまま天井に手をかざした。

「もうちょっとしか目が見えねえぞ。ウネ、お前は今どこにいる？ ちょっとこっち来てくんないか」

「なっ！ 本気かい？ ちょっと大丈夫だろうね？」

ウネは慌てて病床によると、夫の顔を覗きこむ。途端、首裏から頭を引き寄せられた彼女は、驚愕に目を丸くした。

触れ合った唇を、夫が軽く食む。懐かしい仕草で口の端まで吸われてから、やっとのことで解放されたウネが跳ね起きようとすれば、そのまま抱え込まれた頭を骨ばかりが浮き出た薄い胸に押しつけられた。

「おう、ひでえや。かさかさして、艶も柔みもなくなってる。これなら、なんもせんで若い頃のお前のを夢見ていた方がよかったな」

「――と、年甲斐もなくあんなことするからだよっ！」

カチンと頭にきたウネは、真っ赤な顔で夫に怒鳴り返す。いひひ、と漏らした夫の笑声には呼吸音ばかりが耳触りに混ざった。

「だが、いい土産になった。これで充分だ。あんな約束忘れちまえ」

彼は骨ばかりの手で、ウネの白髪頭をゆったりと撫ぜる。

ウネは、夫が自分と同じようにあの日の約束を覚えていたことに驚いた。なぜなら、病床に就いた彼は一度として、そのことを口にしなかった。彼女が独り、彼の理想に見合った花畑を探していたのを、夫は知っていたのかもしれない。そんな花畑など、見つけられはしなかったのだが。

ならば、自分でつくってみるかとうネは野原に花の種を撒こうとした日もあった。だけれど、いざ撒こうとすると、夫の死期が近づくように思えて結局は何もできなかった。

「ウネ」と、彼は静かに息を引き取る。ひゅう、と消えゆく呼吸と鼓動が、どうしても作りものめいて思えた。

急に重みの増した手。同時に、力の失くなった手。ウネは、彼の腕の下から這い出て、面を上げると、彼を見下ろす。

「おや、本当に死んじゃったよ」と彼女は、呟いた。

そうして、老婆は花となる。

忘れろだって、冗談じゃない。あれはあんた独りだけの未来じゃなかったんだ、とウネは、ふ

ふふんと鼻で笑った。

「やだよお、あんた。大体、誰があっちで爺の面倒見るんだい」

な—あ？ とウネは、空の彼方を仰ぎ見る。その形のまま花に変わった彼女は、鮮やかな黄色い花をいくつも細い茎に付けて、上向きに花を咲かす。

消えた老婆になり代わり、茶けた質素な墓周りを、鮮やかな黄色い花畑が取り囲んだ。